

論文内容の要旨

■はじめに

本研究では、日本の森林セラピーマネジメントを通じて地域価値創造の可能性を探求し、科学的根拠に基づく森林浴の進化形としての森林セラピーの効果に注目したものである。人口減少と都市部への人口集中という社会課題に直面している日本において、地域資源を活用した新たな観光マネジメントとして森林セラピー事業に注目する。具体的には、全国の森林セラピー事業者に対するアンケート調査とテキスト計量分析を実施し、森林セラピーが地域経済に与える影響とその持続可能性を明らかにする。

本研究は、地域固有の資源を活用した知識創造とソーシャル・イノベーションの実践が、地域の経済と社会にどのように貢献しているかを論じる。地域の暗黙知や価値観の共有を通じて新たな社会的価値を創造する森林セラピーマネジメントを地域的知識創造と明示し、他の地域へも展開することができるモデルを提示するものである。

■先行研究

本研究は、知識創造とソーシャル・イノベーションの交差する学問的探求を行い、これを日本の森林セラピー事業の先進的マネジメントに応用することを目的としている。知識創造理論の発展を追いつつ、特にソーシャル・イノベーションの視点から地域課題への新しい解決策を模索している。この理論的枠組みは、野中郁次郎らの業績を引用しつつ、暗黙知と形式知を中核とする SECI モデルに基づいており、地域や組織内での社会的な価値創造を促進するものである。

先行研究では、社会課題の増加とそれに伴う経営学の研究対象の拡張が指摘されている。2000年代からは社会起業やCSRのようなテーマが増え、これにより経営学は利益追求から社会貢献へと進化していることが確認されている。森林セラピーにおけるソーシャル・イノベーションは、地域固有の歴史や文化が豊かな日本の森林セラピー実践において、地域コミュニティの健康増進と観光の活性化という二重の目的で利用されている。これにより新たな社会的価値の創造が期待されている。

さらに、本研究は、森林セラピーがどのようにして地域社会の課題に対処し、持続可能な方法で地域資源を活用しているかを探ることで、地域的知識創造のプロセスを具体化する。地域住民が持つ暗黙知の活用とその形式知への変換が含まれ、SECI モデルに基づく知識スパイラルに基づき、森林セラピーはただの健康増進活動ではなく、地域に根差したソーシャル・イノベーションの実践としての潜在能力を秘めていると導き出せる。

また本研究では、地域コミットメントという概念を通じて、地域内での協働と個々の組織や個人の関与がどのように地域を強化し、地域全体の発展に寄与しているかを考察

した。地域価値連鎖を探究し、地域が持つ独自の物語や文化遺産が新たな活動と物語を生み出す持続可能な地域発展につながる道筋を示唆する。最終的には、森林セラピーマネジメントにおける地域内で形成される「場」の概念がどのように組織間の協力と競争を促進し、地域的な課題解決に寄与するかを明らかにする。

■ 研究対象

本研究は、日本における森林セラピーマネジメントを対象として、その組織的および地域的影響を探求するものである。具体的には、国内の65か所の森林セラピー事業がどのように地域の歴史、文化、伝統と連動しているか、またそれらが如何にして森林セラピーの運営に影響を及ぼしているかを詳細に分析する。地域バリューチェーンの概念を活用して、森林セラピーマネジメントの効果的な側面と課題を明らかにする。

アンケート調査では、全国の森林セラピー運営団体を対象にその運営実態と地域活性化の関係を探る。調査結果は、実務へのインパクトを追求するため観光マネジメントに基づいて分析し、テキスト計量分析を用いて、言語的特徴とそのネットワーク構造を明らかにする。

ケーススタディを通じて、特定の森林セラピー事業の具体的な事例を深掘りし、そこから得られる知見をもとに、理論的枠組みを現実のマネジメント実践にどのように適用できるかを探求する。このプロセスでは、知識創造の理論とソーシャル・イノベーションの観点から、森林セラピーマネジメントが地域社会に与える影響とその持続可能性を評価する。森林セラピーマネジメントが地域社会とどのように相互作用し、社会的および経済的価値を創造するかの理解を深めることを目指す。これにより、森林セラピーが地域社会の持続可能な発展にどのように貢献できるかについての洞察を提供することを期待する。

本研究の重点対象として、長野県北部に位置する信濃町における森林セラピー「癒しの森事業」の概略とそのマネジメントに焦点を当てている。信濃町は、約7,800人の人口を擁する自然豊かな町であり、ナラやシラカバ等の広大な森と黒姫高原、野尻湖があり、主要産業は農林業と観光である。2002年に始まった癒しの森プロジェクトは、森林保全の重要性を地域住民が認識して活動するもので、国内外からの研修目的の見学者も多い。

森林セラピー事業においては、御鹿池コース、地震滝コース、象の小径コースの3つのコースが提供されている。森林セラピープログラムでは、参加者の目的や滞在期間に応じて、内容は柔軟に調整される。プログラム内容には、座禅、ヨガ、アロマセラピー、ナイトウォークなどが含まれ、信濃町独自の研修を受けた森林セラピートレーナーの指導のもと、深呼吸を通じてマイナスイオンの吸収や各種セラピープログラムが行われる。

さらに、信濃町は都市部近郊の企業や団体と連携し、企業研修プログラムを提供している。これにはコミュニケーショントレーニングやチームビルディング、自己管理の研

修が含まれ、ストレスホルモンの減少、高血圧の改善、新入社員の離職率低下などの実績を上げている。

運営においては、信濃町役場癒しの森係、委託管理団体 Woods-Life-Community、さとゆめ長野、CW ニコル・アフアン・ウッドランド・トラスト、森林セラピー研究会ひとときの会、癒しの森の宿など 6 つの主要組織が効率的に連携している。2002 年から始まったプロジェクトは、2006 年に森林セラピー基地として認定され、持続可能な事業体質の構築と社会的価値の追求を目指している。

この研究から、信濃町の森林セラピー事業がどのように地域資源を活用し、地域社会と連携して持続可能な観光振興と健康促進を図っているかを明らかにする。また、地域住民や訪問者に新たな価値を提供し、地域産業としての位置づけを強化している事例として有効であることを提示する。

■ 地域的知識創造の理論体系

地域的知識創造におけるメカニズムは、「知識」と「場」の関係性を通じて説明される。共同化の段階では、個々の持つ専門性や実践から得られる暗黙知が、共通の場での出会い、共感が生まれる。地元の人々にとってはその豊かな土壌は日常であり、特別なものとは感じられないが、外部からの視点では新たな発見がある。表出化では、共感を得たチームが地域や行政の協力を得ながら、暗黙知を形式知に変換していく。連結化では、いくつものコミュニティが連携し、知識が広がり場の拡大をもたらす。内面化では、形式知から得た情報が暗黙知として蓄積され、これを持つリーダーは新たなスパイラルへと進んでいく。このプロセスを通じて、地域特有の歴史や文化が可視化され、新しい社会的価値が創造される。

組織的知識創造は企業や組織が競争優位を築くために重要であり、新しい知識の創造、共有、活用を通じて成功と成長が促される。これに対し、地域的知識創造は、地域特有の要素を活用し、地域全体の持続可能な発展を目指す活動である。どちらも暗黙知と形式知の相互作用を基にしているが、その適用範囲や目的において異なる。

組織的知識創造では、企業内でのプロセスは、組織文化やリーダーシップ、技術的インフラといった複数の要素によってサポートされる。組織は知識を自由に流通させ、協働する文化を育むことが求められる。

一方で、地域的知識創造は地域の独自性や資源を最大限に活用し、地域内外の多様なステークホルダーとの連携を通じて行われる。地域資源の活用、コミュニティの連携、外部知識の吸収が主な要素である。特に、地域的知識創造では「場」の拡大が重要であり、地元の人々と外部からの参加者が交流し、新たな知識を共創するプロセスが不可欠である。

地域的知識創造における「場」の拡大は、地域内での共同化の初期段階で形成され、表出化段階での行政や自治体の支援を受けて形式知へと変換され、連結化において複数のコミュニティ形成がなされ形式化が加速する。そして内面化により地域ならではの物

語としてより多くの人々へと広がっていく。このように、地域的知識創造は地域の文化や伝統を活かしながら、新しい社会的価値を創出するための地域全体の取り組みとなるメカニズムを解明したものである。

■ 結論

地域的知識創造は、組織的知識創造と相反するものではない。1980年代から日本型経営の基盤を分析し、日本企業の強みを研究した組織的知識創造企業は、現在でも組織の分析において重要なモデルとして活用されている。地域的知識創造は組織的知識創造企業の発展した型であり、地域の特徴に注目し、そこから新規性を見出す試みである。このプロセスでは、組織的知識創造の理論を地域レベルに応用し、地域社会の活性化や地域独自の新たなビジネスモデルの創出を行うためのものである。

本研究では、知識創造とソーシャル・イノベーションを基盤に、森林セラピーの取り組みとして、東京都檜原村、富山県上市町、鳥取県智頭町、島根県飯南町、長野県信濃町を分析し、特に先進的森林セラピーのモデルケースとして注目される信濃町の森林セラピープロジェクト「癒しの森事業」のケーススタディから地域的知識創造を考察した。信濃町の森林セラピーマネジメントは、主要組織の有機的連携による観光振興や企業研修誘因による経済効果、あるいは地域のブランド化や地場製品の収益向上などで経済的価値を追求するとともに、森林利活用による健康増進や地域振興などの社会的価値を追求する地域的知識創造のスパイラルが形成されていた。

本研究は、知識創造とソーシャル・イノベーションの理論が地域的文脈での適用可能性を示し、地域における新たな動機付けや知識の創出が促進されることに貢献する研究である。